



# 震災証言集

## 東日本大震災

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

日本聖公会東北教区  
東日本大震災被災者支援プロジェクト



# 東日本大震災 震災証言集

「わたしは世の終わりまで、  
いつもあなたがたと共にいる。」  
(マタイ 28:20)



## 東日本大震災 10 周年記念の祈り 特祷

天地の創り主である主よ、今わたしたちは東日本大震災の発生から満 10 年の日を迎え、共に祈るためにここに集いました。東日本大震災の地震と津波によって、そして東京電力福島第一原子力発電所事故によって大きな苦難を受けた人々のために祈ります。またその日から今日に至るまで、新型コロナウイルス感染症をはじめ、幾多の災害が日本国内において、また世界の各地で起こりました。その中で犠牲となった人々、また今なお困難な生活が続いている人々のことも思い、祈ります。どうぞあなたの慰めと励ましのみ力がそれら多くの人々の上にありますように。多くの災害とともに、争い、憎しみの絶えることのない世界にあって、わたしたちがあなたの創造と美しさを回復させるため、小さな器として用いられますよう、力と導きをお与えください。苦しみ、悩む人々と共に歩まれる主イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン

## はじめに

日本聖公会 東北教区主教  
主教 ヨハネ 吉田 雅人

2011年3月11日午後2時46分。あの時から「はや」10年の刻が過ぎました。「はや」と言うべきか「まだ」と言うべきか、それは人によって違っているかもしれませんが。物理的な時間は刻々と流れていきますが、その渦中にある人にとっては長く感じたり短く感じたりする、これは当然のことでありましょう。

10年前のあの刻、私は京都におりました。ニュースの映像で津波が名取川を遡っていく光景、荒浜の田畑をなめていく波の前の方を逃げ走る自動車の光景、とてもショックだったのと同時に、「早く、速く」と心の中で叫んでいる私がいたことを覚えています。そして7月には1週間と短い間でしたが、神学生と共に青葉静修館に宿泊させていただいて、東松島市の宮戸島・石巻市の北上町などで少しだけボランティア作業をさせていただきました。同行した神学生の中には、4月に入学したばかりで、「こんな時に神学校で勉強なんかしていていいんだろうか」と悩んでいたW神学生もおりました。

個人的な話で恐縮ですが、26年前、私は家族とともに神戸に住んでおりました。阪神・淡路大震災を経験いたしました。倒壊こそまぬがれましたが全壊判定を受けた古い木造住宅の2階で経験した震度6か7の揺れ、揺れの最中に澄んだ音を響かせた大聖堂の鐘の音、2～3階が押し潰されたビル。他にも多くの出来事が身体に染みついているように思います。しかし、東日本大震災は津波がすべてのものを押し流し、東京電力福島第一原子力発電所事故による放射能汚染が今でもコントロールできていません。これらが、私たちが今までに経験した地震災害とは大きな違いでありましょう。

この度、東北教区東日本大震災被災者支援プロジェクトから、『震災証言集』が発行されることになりました。10年前の出来事の記憶のみならず、今に至るまでの生活の細やかな記録です。そこにはこの10年の時を刻まれたお一人おひとりの魂の記録でもあります。どうぞ手に取っていただいて、証言をお寄せくださった方々の人生の刻を、少しでもご一緒に祈りのうちに歩むことができればと願います。

この『震災証言集』に自らの経験をお寄せくださった皆様、編集等の任を果たしてくださった支援プロジェクトのメンバーの皆様に感謝しますとともに、どうぞ、最後までお目を通していただきますようお願いしてやみません。

## 発行にあたって

東日本大震災被災者支援プロジェクト

リーダー 司祭 フランシス 長谷川 清純

当プロジェクトでは、昨年来東日本大震災から10年が経つ2021年に、やはり記念してのプログラムを行うと協議して、大きな2つの事を決めました。1つは、東日本大震災10周年記念合同礼拝、もう一つがこの『震災証言集』の発行です。

2020年早々から新型コロナウイルス感染症が拡大しており、今年は収まっているのかどうなるのか見当も付かない状態でしたが、記念礼拝は3月13日(土)に開催日を設定して、旧磯山聖ヨハネ教会境内地に整備された「祈りの庭」で、集まれる人を限定したとしても、合同で礼拝を献げたい一心で準備を進めていました。しかしながら、今年に入っても感染拡大は止まず第3波に襲われて、記念合同礼拝は断念せざるを得ませんでした。3月11日の当日は、昨年同様に東北教区内の7教会を会場にして、同一式文と同一聖歌を用いて午後2時46分にそれぞれに鐘を鳴らすことにして、犠牲者の魂の平安と、未だ大震災によって苦しむ人たちに憐れみとお力付けを祈り礼拝を献げました。

『震災証言集』の発行は、気が重い決断でもありました。あの日の出来事を文章にするのは、言葉にしたくないほど、思い出したくないほどに辛い経験をもう一度味わうことになりはしないかと、正直躊躇させるものがありました。しかし、あれから10歳年を取ってしまいましたし、忘れたいけれども忘れられない辛い記憶だとしても次世代に伝えていかなければならないだろう、それは私たちの使命なのではないかと考えました。実際、広い東北地方の被災地の各地では、それぞれに様々な形で伝承手段を設けています。私たちも各々が経験した突然の出来事から、今日その生活を再構築するまでの過程を刻んでおきたいと願いました。2011年5月「いっしょに歩こう！プロジェクト」の支援活動で出会った方々に原稿の依頼をしましたが、数え切れないほど大勢ですので、皆様全員にご依頼は出来ませんでした。お断りとお詫びを申し上げます。ご賛同ご執筆いただいた皆様には、心から感謝いたします。なお編集の際、執筆者名の前に「水曜喫茶」等々関係先を表記しています。

10年目という節目の年に当たって、私たちはあの出来事を風化させないため、記憶を残すことが出来ました。有り難うございました。主に感謝！

# 目次

東日本大震災 10 周年記念の祈り特祷 i

はじめに ii

発行にあたって iii

## 証言集 ..... 1

東日本大震災 10 周年に寄せて 76

## 付録 ..... 77

10 年の歩み 78

拠点における動き 80

現在の活動 81

あとがき ..... 82

# 証言集

## 3/11 東日本大震災前後 磯山での記憶

司祭 ヤコブ 林 国秀

2011年2月27日・顕現後第8主日、当時仙台で勤務していた私は、その日の仙台基督教会の主日礼拝を李<sup>いちゃん</sup> 贊熙司祭に委ね、早朝から管理牧師を務める磯山聖ヨハネ教会へと向かっていました。前日には信徒の三宅<sup>みのる</sup> 實兄から「司祭さん、明日は近くの磯浜漁港でホッキ祭があるので、浜辺の道路はとても混雑しますから気を付けて来て下さいね」と電話をいただいております。そのようなわけで、いつもより少し早めに教会を出発しましたが、三宅實さんのお話の通り、磯山に近づくにつれ、教会付近はそれまで見たこともないほどの車で溢れ、礼拝開始ぎりぎり教会に到着しました。信徒の皆さんはすでにお揃いで、「すごい人出でしょ」といいながら、それでも私をニコニコと迎えてくださいました。外の喧騒とは対照的に礼拝堂には静寂と落ち着いた荘厳な空気が漂う中、聖餐式を捧げました。三宅行さんご夫妻、三宅實さん、三宅信一さん、そして中曽順子さんが出席されており、その日は順子さんがオルガニストの奉仕をされました。順子さんは近くの幼稚園に勤めておられ、父の實さんと交替で奏楽の奉仕をされていました。その日も、全てのメンバーではありませんでしたが、いつものように礼拝を捧げ、いつものように礼拝を終え、いつものようにお茶をいただき、また来月お会いしましょうと約束し、本当に幸せな気持ちで家路に着いたのでした。しかしその時、誰がその日の礼拝が磯山聖ヨハネ教会旧礼拝堂での最後の主日の聖餐式になると思ったでしょう。そしてその後に起きるあの忌まわしい出来事を誰が想像したでしょうか。

そして2011年3月11日（金）。2日前に大斎始日を迎え、その日もいつものように主教座聖堂では小聖堂において午前10時から平日の聖餐式が捧げられました。その日の午後、松島で所用がありましたので、午後2時過ぎに教会を出発し、その道中、利府街道の新幹線高架橋下に差し掛かった午後2時46分、突如大きなうねりの様な地面の揺れが起こったその時から、私の東日本大震災が始まりました。とにかくただならぬことが起こったことを直感する中、なんとか教会に辿りつき家族や教区会館にいらした全ての皆さんが無事であったことを確認し合い、喜びましたが、ひっきりなしに続く余震の中、眠れぬ長い夜が過ぎていきました。

そして早速翌日から、信徒有志と教会の皆さんの安否を尋ねる作業が始まりましたが、インフラが断絶した状況の中での作業は困難を極めました。大震災の2日後3月13日に迎えた大斎節第1主日の礼拝は、旧教区会館のホールで行なうこととなりましたが、教役者を含め35名もの方々が集い、加藤博道主教の司式・説教により感動的な礼拝が

捧げられ、合わせて大震災の犠牲者、被災者を覚えて祈りました。参加者は信徒のみならず、石巻で被災したという一般の青年も参加されていました。その翌日、加藤博道主教により「東北教区災害対策本部（仮）」の看板が旧教区会館ビンステッドホール入口に掲げられ、情報収集、安否確認、必要な支援に取り組むことを表明し、その働きが開始されました。テレビでは各地の被害の様子が報じられ、磯山聖ヨハネ教会のある新地町も新地駅にまで津波が押し寄せ電車と線路さえ流された映像が映し出され、信徒の方々とも連絡が取れない状況の中、不安が募っていきました。その夜、磯山の中曽順子さんの夫・茂さんから電話をいただき、丘の上に立つ教会は無事で、教会へ逃げて助かった方々がいらしたことを、また、三宅行さんのご家族、三宅信一さんご家族が無事だったことをお聞きしました。しかし義父の三宅實さん、義母のよしみさんご夫妻が津波により行方不明となっていること、そして妻の中曽順子さんが、津波で溺れかかった幼稚園の子どもたちをずぶぬれになりながら助け、冷えた自分の体を温められずに、寒さが原因でその夜亡くなられたという衝撃的なお話を告げられました。電話口でお祈りを捧げましたが、涙で声になりませんでした。

その後も磯山には、津波で分断された道路の事情などでなかなか訪問できずにおりましたが、「災害救援」の許可を得た自動車が神戸教区の坪井執事から与えられことにより、3/21、震災後初めて仙台基督教会の信徒2名とともに、全国から届いた救援物資を車一杯に積み込み、磯山を訪問しました。皆さんは、近くの福田小学校体育館に地元の方約100名とともに避難生活をしておられ、再会を喜び合い、校庭の片隅で中曽さんご家族、三宅信一さんらとともに祈りを捧げました。帰路の途中、教会に立ち寄ろうとしましたが、教会近辺は津波により道路も悉く破壊され、危険だということで自衛隊の方々にも説得され、教会に寄れずに、仙台に帰ってきました。

それから幾度となく磯山に出向くことができましたが、忘れられない訪問は4/24の復活日の出来事です。仙台基督教会で作り、祝福したイースターエッグや救援物資のクッキーなどを携えて福田小学校を訪問すると、信徒の皆さんが校庭の真ん中に集まってくださり、ともに復活日のお祈りを捧げ、ご聖体の拝領をされました。すると体育館の中から幾人かのご高齢の方が出て来られたのでイースターエッグを差し上げたところ、幼い頃の記憶がよみがえったのでしょうか「ランソン先生の教会の人かい？」とってお祈りに加われ、子どもころ山の上で聖書の紙芝居を読んでもらった話や、いたずらをして怒られた話など、皆さん目を輝かせてお話くださったのです。その後体育館に避難した方々のほとんどが広畑仮設住宅に移られましたが、そこでもランソン先生のお陰ですぐに多くの皆さんと親しくさせていただきました。ランソン女史の精神は磯山で生

きて働きたもうと確信すると同時にその後開始された「いっしょに歩こう！PJ」の働きや新地支援センターでの活動にも、本質は変わらずに受け繋がれ、東日本大震災から今年で10年経た今も、これからも途切れず繋がっていくことを確信いたしております。

主に感謝。



## 東日本大震災 10 周年に寄せて ― 祈り



2011 年 3 月 11 日、起った出来事は、まさに激甚としか言いようのない激しさと驚きに満ちていました。自然の力の前に、人間の営み、文明が築き上げたと思っていたものが、いかに無力であるかを思い知らされた日となりました。同時に、危機的状况の中であって、それに立ち向かう人々の責任感や勇気、また善意が示された時でもありました。

あの日を境に、多くの人の人生が変わりました。多くの人が愛する家族や親しい人、仕事や故郷を失いました。直接の被災者ではない方たちでも、あの日から自分の人生は変わったと感じ、生き方を変えてこられた方々も少なくありません。それぞれの人にとっての 10 年、どのような思いや状況で過ごしてこられたかは、とても簡単に言葉にすることは出来ません。

東日本大震災の被災地は、地域の回復に向けて懸命の努力を続けてこられました。10 年間のその労苦が報われますように、少しでも生活の落ち着きを取り戻されますようにと祈ります。しかし同時に本当の回復への道のりはまだ途上にあり、目に見えない傷ついた部分、癒されていないことは多々あるでしょう。世界最悪レベルと言われる原子力発電所の爆発事故によっては、いまだに事故処理そのものが収束せず、将来的な展望も見えない中、帰還困難の状態に置かれた人々の避難生活が今このときも続いています。

どうか必要な休息が与えられますように。そしてまたそれぞれの仕方で、立ち上がっていく力が与えられますように。わたしたちの教会もその歩みを共にするものでありますように。そして東日本大震災をはじめ、多くの災害の中で地上の生涯を終えて、天の主のみもとにある方々が、今はすべての重荷を下ろし、永遠の平安のうちに安らぐことが出来ますように。お祈りいたします。

父と子と聖霊の御名によって、アーメン

〈東日本大震災 10 周年記念の祈り 仙台基督教会・主教座聖堂

2021 年 3 月 11 日 説教より〉

主教 ヨハネ 加藤 博 道



# 10年の歩み

3月11日に東日本大震災が発生してから、これまで多くの方に支えられ東北の地で活動してきました。その活動は多岐に渡り、その多くは年表に記載することができませんでしたが、作成する中でたくさんの方々のご協力があったからこそその活動であったと改めて感じています。年表をご覧になりながら、この10年をともに思い返していただけたら幸いです。

## 2011

- 3月 11日午後2時46分 東北地方太平洋沖地震発生  
東京電力福島第一原子力発電所事故発生  
仙台では信徒による安否確認や物資・祈りによる助け合いが始まる  
主教座聖堂に「東北教区対策本部」を設置  
各教区より応援人員・緊急車両による援助物資が到着  
小名浜聖テモテ教会が緊急支援拠点となる。
- 4月 「日立ボランティアセンター」開所
- 5月 日本聖公会被災者支援「いっしょに歩こう！プロジェクト」が始動、仙台に拠点が置かれる
- 7月 磯山聖ヨハネ教会信徒犠牲者3名の葬送式  
名取市仮設住宅で「買い物バスツアー」開始。「しょうがい者施設支援（仙台市、気仙沼市）」「外国人被災者支援（南三陸町志津川）」「漁業者支援（石巻市十三浜）」「在宅被災者支援（仙台市岩切）」「ふじ幼稚園支援」開始
- 8月 磯山聖ヨハネ教会仮礼拝堂で月1度の主日礼拝再開  
他教区との協働・支援により、「小名浜ボランティアセンター」、「釜石被災者支援センター」開所  
大韓聖公会大田教区マイケル・クォン・ヒョン主教一行来訪
- 9月 新地町「広畑仮設お茶会」、小名浜「ほっこりカフェ」開始  
教区宣教120年記念大礼拝を取り止め、各地6回の合同礼拝で実施（～11月）
- 11月 第91（定期）教区会「磯山聖ヨハネ教会復興プロジェクト」設置、福島子どもリフレッシュプログラム

## 2012

- 2月 米国聖公会総裁主教キャサリン・ジェファーツ・ショーリ主教一行来訪
- 3月 1周年記念礼拝 磯山・仙台主会場、釜石で開催
- 5月 日本聖公会第59（定期）総会にて「原発のない世界を求めて～原子力発電に対する日本聖公会の立場～」を決議  
大韓聖公会首座主教金根祥主教一行来訪
- 6月 「センターしんち」開所
- 7月 震災後初の「教区修養会・被災の地に立つ」を南三陸町志津川で開催
- 8月 「全国青年大会」仙台で開催。全国や大田の青年が被災地を訪問  
英国聖公会マイケル・イブグレイブ主教来訪
- 10月 カナダ聖公会首座主教フレデリック・ヒルツ主教一行来訪

## 2013

- 1月 郡山聖ペテロ聖パウロ教会会館落成
- 2月 磯山聖ヨハネ教会礼拝堂聖別解除、翌月解体
- 3月 2周年記念礼拝 郡山を主会場に開催  
若松聖愛幼稚園新園舎落成  
台湾聖公会頼榮信主教一行来訪
- 4月 釜石神愛幼児学園新園舎落成

- 5月 「いっしょに歩こう！プロジェクト」活動期間終了
- 6月 「東北教区東日本大震災被災者支援室『だいに・東北』」始動。被災地での働き、障がい者施設支援、購入支援、外国人支援、被災地訪問等の活動が引き継がれる  
日本聖公会「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」発足
- 7月 フィリピン聖公会ジョエル・パチャオ主教一行来訪
- 9月 「被災の地に立つII」新地町で開催
- 10月 カンタベリー大主教来日。加藤主教、磯山聖ヨハネ教会信徒と会談

## 2014

- 3月 主教座聖堂 仙台基督教会新礼拝堂聖別  
3周年記念礼拝 盛岡、仙台、福島で開催
- 8月 「日韓聖公会青年セミナー」仙台、新地で開催
- 9月 「被災の地に立つIII」釜石で開催

## 2015

- 3月 4周年記念礼拝 仙台で開催。大田教区兪樂濬（ユ・ナクジュン）主教来訪
- 5月 「だいに・東北」活動期間終了、働きを「東日本大震災支援室」に移行
- 6月 「センターしんち・がん小屋」閉所
- 9月 「被災の地に立つIV」新地町・南相馬市で開催

## 2016

- 3月 5周年記念礼拝 仙台で開催
- 9月 「被災の地に立って祈るV」小名浜で開催

## 2017

- 3月 6周年記念礼拝 仙台で開催
- 6月 磯山聖ヨハネ教会新礼拝堂聖別

## 2018

- 3月 7周年記念礼拝 教区内 12 教会で開催
- 6月 支援室主催「被災地巡りツアー」開始
- 10月 磯山「祈りの煉瓦倶楽部感謝の集い」開催
- 11月 支援室は「東日本大震災被災者支援プロジェクト」に改称

## 2019

- 3月 8周年記念礼拝 教区内 10 教会で開催
- 5月 日本聖公会「原発のない世界を求める国際協議会」仙台市で開催、声明を発表

## 2020

- 1月 映画『福島は語る』仙台基督教会で上映
- 3月 9周年記念礼拝 教区内 10 教会で開催  
新型コロナウイルス感染症流行により、定期支援プログラムを一時休止
- 6月 「名取買い物支援バス」再開
- 7月 新地町「水曜喫茶」再開
- 10月 新地町「広畑お茶会」再開  
日本聖公会第 65（定期）総会「原発のない世界を求める週間」設置を決議

## 2021

- 3月 10周年記念礼拝を 8 教会で開催。主教座聖堂での礼拝はライブ配信を実施

# 拠点における動き



2011～2013年

いっしょに歩こう！プロジェクト 釜石ベース  
支援物資の配布から始まった活動は、料理や歌を通して交流の場を提供した「談話室プログラム」を実施。

2013年～

釜石支援センター望

釜石支援センター長の海老沼氏を中心に、市民ボランティアが活動を担う支援団体が発足。

2011～2013年

いっしょに歩こう！プロジェクト 仙台圏ベース  
プロジェクトの事務所が置かれた他、仮設住宅居住者や在宅被災者、外国人被災者、漁業者への支援等も行った。

2013～2015年

東日本大震災被災者支援室 だいに東北

仮設住宅居住者や障害者就労支援など、やいっしょに歩こう！プロジェクトから活動を引き継ぎ、継続的な支援を実施。

2015年～

東日本大震災被災者支援プロジェクト（旧 東日本大震災支援室）が発足。

2011～2013年

いっしょに歩こう！プロジェクト 新地ベース  
磯山聖ヨハネ教会とのつながりを大事にしながら、町内の複数の仮設住宅へ物的・心的サポートを行った。

2013～2015年

だいに東北 センターしんち

「原発の放射能に関する特別問題プロジェクト」と協力しながら、いっしょに歩こう！プロジェクトから活動を引き継ぎ、新地町の方々や福島第一原発事故による避難者への支援活動を行った。

2011～2013年

いっしょに歩こう！プロジェクト 福島ベース  
放射能被害に苦しんでいる方々へどのような支援ができるのか、丁寧に模索した。

2013～2016年

原発と放射能に関する特別問題プロジェクト

郡山オフィス

特別問題プロジェクトの事務的な働きを行いながら、幼稚園への支援活動も実施。

2011～2013年

いっしょに歩こう！プロジェクト 小名浜ベース  
放射能被害によって移住せざるを得なかった方々が住む仮設住宅とつながり、心的支援を行った。

2013～2016年

原発と放射能に関する特別問題プロジェクト 聖テモテ支援センター

幼稚園児へのリフレッシュプログラムや、仮設住宅居住者への継続的な支援を実施。

# 現在の活動

## お買い物支援

関上地区の被災者が居住していた「箱塚桜応急仮設住宅」の買い物支援として、2011 年から継続している。

現在は災害公営住宅が建てられ、そこで生活している方々を対象に、毎週木曜日に活動している。

仮設住宅から移り住み、交流が減った利用者にとって、往復の車内が交流の場となっていると聞く。



## 広畑お茶会

旧磯山聖ヨハネ教会の周辺の新地町埴浜周辺地区住民が入居した広畑応急仮設住宅集会所にて、「いっしょに歩こう！プロジェクト」が月1回お茶会を催した。仮設から出られた後も作田コミュニティセンターで変わらず行われ、現在は仮設があった土地の向かいにある勤労青少年ホームの一室でオープンしている。現在は15名前後の賑やかな集まりで、間もなく100回目を数える。

## 水曜喫茶

「いっしょに歩こう！プロジェクト・被災者支援センターしんち」の活動のひとつとして開始。参加者は原発事故によって故郷を追われた方々で、会場はセンターしんちから、がん小屋仮設集会所、それぞれ新しい家に入居した現在は勤労青少年ホームへ移し、月2回ペースで開催。毎回7、8名の利用者は開設以来全国数力所から届けていただく茶菓子とともに数少ない交流の一時を楽しみにしている。



## 被災地巡りツアー

「だいに・東北」活動時から行っていた、被災地の現状見聞や研修等へ訪れた方々の案内に加え、教区内の方々を対象に現状見聞や、新しくできた震災遺構や研修施設への案内などを実施している。

また教区外より被災地訪問の同行を求められた際には、被災地の今を知ってもらうためルートの提案も含めたコーディネートも行っている。

# あとがき

2019年6月に開催された東日本大震災被災者支援プロジェクト会議にて、東日本大震災10周年をどのように迎えるか協議の時を持ちました。その際に、記念行事と併せて「震災による被害を受けた方、被災者支援に携った方からお話を伺い、ひとつの本にまとめてはどうか」との意見が出ました。

当初は2021年3月11日に、この10年様々な形で携わっていただいた方々にお集まりいただき、東日本大震災を覚えての祈りとともに、証言を伺ったり災害について考えたりするシンポジウムを開催し、その場において証言集の配布を検討しておりました。しかし、感染症による未曾有の危機となり大規模な記念行事は断念。10周年は7つの教会で祈りを献げ、主教座聖堂の礼拝をライブ配信するのみに留まりましたが、やや遅れながらもこの証言集は完成に至ることができました。

編集を進める中で、その時それぞれの場でどのような事態があったのか、被災者と支援者がそれぞれどのような思いの中過ごされていたのか、鮮烈に伝わってきました。そのような原稿を拝見し、「私たちにまとめられるのだろうか…」と不安に思うこともありました。しかし、だからこそ今形に残しておかなければと思い直し、編集に取り組んでまいりました。お読みいただく中で、様々な感情が生まれると思います。ぜひ、その気持ちをひとりで抱え込まずに、お近くの方と共有いただき、またこの本を回読いただけましたら幸いです。

本来であれば、これまで関わっていただいたすべての方がそれぞれ感じた、経験した思い、そのすべてを掲載させていただきたいところでしたが、編集の都合上限られた方のみへの原稿依頼、掲載となってしまったこと申し訳ありません。しかし、今後また違う形でその思いをお聞かせ願えることができればと思っていますので、その際はどうぞよろしくお願いいたします。

『震災証言集』発行にあたり、原稿執筆の依頼を快く引き受けてくださった皆様、ご協力いただいたすべての方々へ心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

日本聖公会東北教区

東日本大震災被災者支援プロジェクト

震災証言集編集部



---

# 東日本大震災震災証言集

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

発行日：2021年10月11日

発行者：日本聖公会 東北教区

東日本大震災被災者支援プロジェクト

〒980-0803 宮城県仙台市青葉区国分町 2-13-15

TEL 022-223-2349 FAX 022-223-2387

URL <https://nssk-tohoku.com/support/>

編集者：日本聖公会東北教区

東日本大震災被災者支援プロジェクト 震災証言集編集部

司祭 長谷川 清純 赤坂 聖矢 梅津 庸子 佐藤 由美子

---



